絵巻と草双紙―『化物婚礼』絵巻と十返舎一九『化物の娵入』考

文学研究科国文学専攻博士後期課程満期退学　大内　瑞恵

はじめに

明治二十年（一八八七）に、井上円了博士により設立された「私立哲学館」から始まる東洋大学、その附属図書館の蔵書には、怪異・妖怪に関する資料も多く所蔵されている。

このような書き出しで、平成二十七年（二〇一五）に「笑いと招福の図―『百鬼夜行絵巻』と『化物婚礼』」の表題で東洋大学附属図書館蔵『化物婚礼』について簡単な紹介の場を頂戴した。現在、この絵巻は東洋大学附属図書館ホームページで見ることができる。このホームページは、平成二十七年三月段階では初期のテスト公開であったため作品の全体公開ではなく、トピック的なものとなっているが、『化物婚礼』の十七図を公開中である。

この「化物婚礼」絵巻は現在数点が知られるが、その序文を読むと近世日本における怪異のイメージと、怪異を楽しむ人々の姿が浮かび上がる。

『化物婚礼』の図像と『百鬼夜行』との関連、及び序文の翻刻と読解を平成二十九年『日本文学文化』に紹介し、その研究の第一歩とした。

ここで整理したのは次の三点である。

（1）『化物婚礼』の諸本。

（2）『化物婚礼』の図像と『百鬼夜行』の図像の類似と読み換え。

中世において成立した「百鬼夜行絵巻」は現在模本異本あわせて十数本が見つかっている。なかでも『百鬼夜行絵巻』（真珠庵蔵本・伝土佐光信画）が有名であろう。器物が変じた付喪神や妖怪など異形のものたちが、夜ねりあるく様子を描いた絵巻である。その配列を見ると、真珠庵本と類縁関係にある模本が存外少なく、おそらく真珠庵本には祖本があり、日本文学研究センター蔵本の方が、より粗本に近い配列ではないか。また、この真珠庵本と日文研蔵本を統合して描かれたものが東京国立博物館蔵本ではないかと、小松和彦氏が報告された。〈注1〉

これらを踏まえて『化物婚礼』と『百鬼夜行』を比較してみた。

まず、類似点としては、『化物婚礼』に登場する化物の行列は『百鬼夜行』を意識したものである。一方、『百鬼夜行』の巻末は（A）火の玉で終わるか、（B）黒雲で終わるか、（C）火の玉の後に黒雲で終わるといった違いがある。しかし『化物婚礼』においてのクライマックスは朝日の登場とそれによる化物の逃亡、そして宝船による「千秋萬歳寶入船」という祝い言である。

中世仏教的世界観を示す「百鬼夜行」を近世的な笑い（笑いには厄除けの意もあろう）の世界に読み換えた絵巻が「化物婚礼絵巻」という作品群と言えよう。単なるパロディではなく、そこには化物に対する感覚の違い（時代の変化）が明確に表されている。

（3）序文に記された怪異の言葉。俳諧師でもあった絵師、鳥山石燕描くところの『画図百鬼夜行』などと関連して見えるが、そもそも怪異小説のみならず、俳諧などにおいても怪異の表現が謡曲（能）のイメージからよく使われていたこと。

このような概要であったが、その後、十返舎一九『化物の娵入』と絵巻の序文に共通性があることを知った。この『化物の娵入』はアダム・カバット氏『江戸化物草紙』[注2]に影印・翻刻がある。また、同書には湯本豪一氏「化物嫁入絵の不思議」[注3]があり、『化物婚礼』絵巻及び、草双紙と絵巻と明治以降の「化物婚礼」物が紹介されている。

その上で、本稿では絵巻の序文と十返舎一九『化物の娵入』との差異に注目したい。

東洋大学附属図書館蔵『化物婚礼』

東洋大学附属図書館蔵『化物婚礼』巻子本一軸は、縦二六．五糎×横一三四八．七糎。伝河鍋暁斎筆。構成は次の通りである。「化物婚礼の序」が巻頭に記され、①～⑰の図が描かれる。

「化物婚礼」の諸本

「化物婚礼」図は、東洋大学蔵本のほかに次の絵巻が知られている。

『化物婚姻絵巻』松井文庫蔵　岡義訓筆　文久三年（一八六三）成立（奥書による）[注4]

『化物婚礼絵巻』国際日本文化研究センター蔵[注5]

『化物婚礼之図』宮崎県総合博物館蔵[注6]

『化物婚礼絵巻』一巻　（二〇一五年七夕古書大入札会）

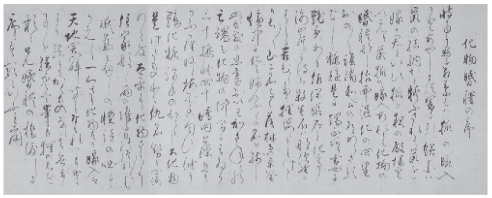
『化物婚礼絵巻』個人蔵　間部詮実（一八二七―一八六四）[注7]筆

『化物の嫁入絵巻』河鍋暁斎画　（湯本豪一氏論文による）

『化物の嫁入絵巻』（湯本豪一氏論文による。残欠絵巻）

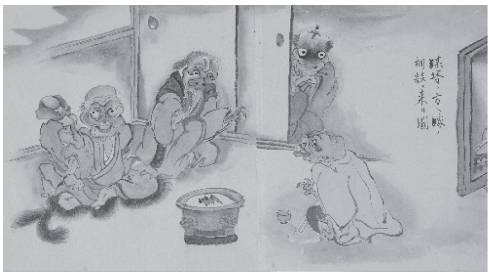
国際日本文化研究センター蔵本には場面名はないが、図様・構成は同じである。

松井文庫は肥後熊本藩細川家の家老松井家のコレクションであり、間部詮実は越前鯖江藩藩主である。また、宮崎県総合博物館蔵『化物婚礼之図』は日向の豪商小田家伝来である。よく似た画と構図であるが、それぞれ微妙な差異があるところから、共通の粉本があっ



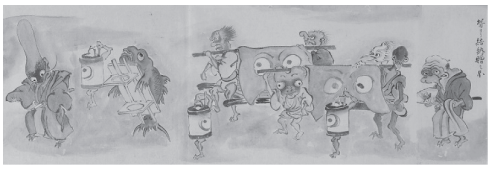
「化物婚礼の序」

①媒嫁ノ方へ婚姻申入ル図

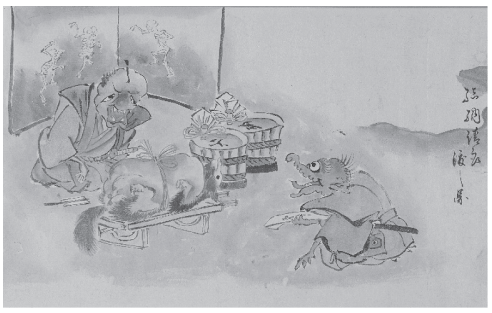


②媒婿ノ方へ嫁ノ相談ニ来ル図

③嫁婿見合ノ図

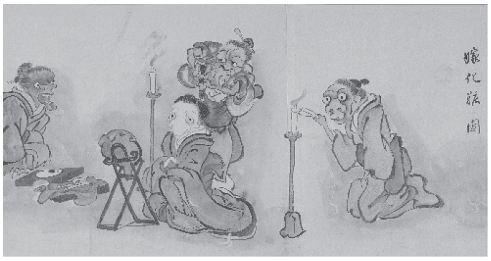


④婿ヨリ結納贈ル図

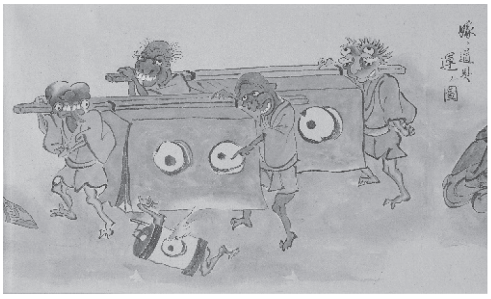


⑤結納請取渡し図

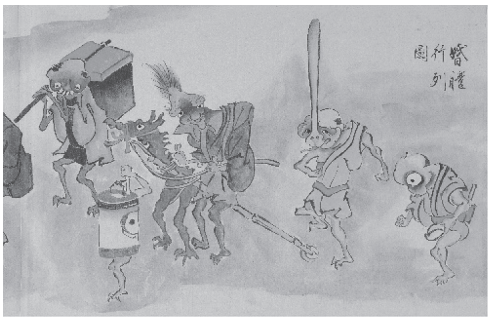
⑥嫁婚礼衣装仕立図



⑦嫁化粧ノ図



⑧嫁ノ道具運ノ図



⑨婚礼行列図

⑩婚礼儀式盃ノ図

⑪婚礼祝膳ノ図

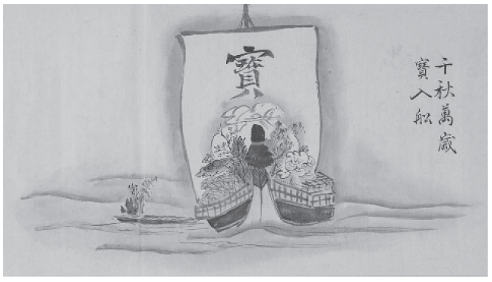
⑫纐帯ノ祝儀　一家祝ニ来図

⑬安産ノ図

⑭産ノ祝酒宴馳走図

⑮宮参図

⑯化物日ノ出ニ驚逃散図



⑰千秋萬歳寶入船

たと考えるべきであろう。そして、それは大名家や豪商に関係する絵師に伝来したものであろうか。

「化物婚礼」と「百鬼夜行絵巻」

この絵巻についてまず、注目される点は、前述の通り「百鬼夜行絵巻」との共通部分であろう。⑧嫁ノ道具運ノ図や⑯化物日ノ出ニ驚逃散図などは明らかに「百鬼夜行絵巻」を意識した図様・構図である。（次ページ図参照）

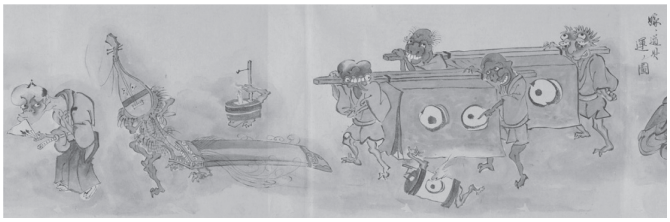
東洋大学附属図書館蔵『化物婚礼』の序文

東洋大学附属図書館蔵『化物婚礼』の序文に署名・日付はない。この序文を記したのが絵師であるのか、他者であるのか不明であるが、次のような内容となっている。（以下、翻字の句読点は稿者による）

時雨に照る紅葉はハ、狐の娵入かとあやしまれ、闇に引餅花ハ、鼡の結納かと疑ふ。されば鼠を嫁が君といひ、狐を夜の殿様といえり。鼠狐の嫁入あれども化物の婚礼なし。胎卵湿化の四生おのおの陰陽和合の道あらざるなし。轆轤首に端正あり、雪女に艶美あり。佐保姫石と化て海岸に待ち、殺生石は那須野がはらに苔むしたり。狸婆々とばけてかちかち山に名高く、茂林寺の茶釜爐中に化てぶんぶくの名を残し、皿屋敷の怨霊、おいわ、かさねの亡魂も化物の仲間にはゐり、三十振袖、四十嶋田、藻

はかぶらねど、梅花香匂ひ油に艶化粧。作手のかたりし大化物是けだものと仇名せり。四海めで度太平に化物さらに住家なく、雨の降る日のつれづれも眠気ざましの怪談の咄にかえし一くさり。化物共が嫁入は天地開闢、聞くことなければ、もとより絵にもかくものなし。其無き事を絵空言。筆も狸の毛を頼ミ、先婚礼の橋渡しに序するということか。

一方、国際日本文化研究センター蔵『化物婚礼絵巻』は次のように記される。



⑧嫁ノ道具運ノ図

東洋大学附属図書館蔵『百鬼夜行図』　楽器の化物（付喪神）

世に画工を業として種々の物事を描く先生もあれども未た化物の奇々妙々を描きし人あらず。わか友庭先生は新たに工夫をなして図画す。然るに狐の嫁入鼡の千種と疑ふ。されは鼡を嫁か君といひ、きつねを夜の殿さまといえり。鼡狐の嫁入りあれども化物の婚礼なし。胎卵湿化に四生おの〳〵陰陽和合の道あらざるはなし。轆轤首に端正あり。雪女に艶美あり。佐用姫は石と化し、海岸には舩幽霊殺生石は那須野に苔むし狸は婆と化てかち〳〵山に名高く茂林寺の茶釜炉中に化て文福の名を揚げ、

⑯化物日ノ出ニ驚逃散図

東洋大学附属図書館蔵『百鬼夜行図』火の玉より逃げる化物

皿屋敷のおきく、四ツ谷のおいは、かさねの亡霊も化物の仲間に入り、三十振袖四十嶌田藻は冠らねと梅華香匂ひ油に艶化粧、昼にかはりし大化もの是けだものと仇名せり。四海芽出度泰平に化物更に棲なし。雨の降る日のつれ〳〵も睡気ざましに怪談の咄しにかへし一とくさり化物ともの娵入りは天地開闢聞くことなければ元来絵にもかくものなし。そのなきことを絵そらこと筆も狸の毛をたのみ、まづ婚禮のはしわたしに序するといふこと南

狢　穴住画（花押）

こちらは「狢穴住」と名乗る人物が「わが友庭先生」の新たな工夫（化物の婚礼画）を紹介する文ということになっている。ともに、類似の表現であるが、微妙にその言い回しや表記が異なっている。共通の粉本をもとに記したと考えられるが、微妙に異なる。「狢穴住」という戯号と髑髏の花押を描く趣向である。

この狢穴住の署名はほかに松井文庫本・宮崎県総合博物館本に見られる。ただし、本文は東洋大学蔵本に近い。

松井文庫蔵『化物婚姻絵巻』

時雨に照るもみち葉は、狐の嫁入かとあやしまれ、闇に引餅花は、鼡の結納かと疑ふ。されは鼡を嫁か君といひ、狐を夜のとの様といへり。ねつみ狐のよめ入有れともはけものゝ婚礼なし。胎卵湿化の四生各陰陽和合の道あらざるはなし。轆轤首に端正有り、雪女に艶色あり。佐保姫石と化て海岸に峙ち、殺生石は那須野がはらに苔むしたり。狸は婆々と化てかちく山に名高く、茂林寺の茶釜は爐中にはけてぶんぶくの名を残し、さら屋敷の幽霊、お岩、重ねの亡魂もはけものゝ仲間に入り、三十振袖、四十嶌田、藻はかふらねと、梅花こふ匂ひ油に艶化粧。作手のかたりし大化物是けたものと仇名せり。四海芽出度太平に化物更に住家なく、雨の降る日の徒然に眠気さましの怪談の噺にかえし一綴り。化物ともか娵入は天地開ひやくきく事なけれは、素より絵にも書ものなし。其の無き事を繪空言。筆も狸の毛をたのみ、まつ婚禮の橋渡しに序するといふことしかり。

よろこひ永き三ッのとし

たのしき初酉のむつき　狢の穴住述

宮崎県総合博物館蔵『化物婚礼之図』

時雨に照るもみち葉は狐の嫁入かと思ひ、闇に引餅花は鼡の結納かと疑ふ。されば鼡を嫁が君といひ、狐を夜の殿様といへり。鼡狐の嫁入あれども、化物の婚礼なし。胎卵湿化の四生、をの〳〵陰陽和合の道あらざるはなし。轆轤首に端正あり、雪女に艶色あり、佐保姫石と化て、海岸に峙ち、殺生石は那須野が原に苔むしたり。狸は婆々と化てかち〳〵山に名高く茂林寺の茶釜は鑪中に化てぶんぶくの名をのこし、皿屋敷の幽霊、於岩、かさねの亡魂もばけものゝの仲間に入り、三十振袖四十嶌田藻はかぶらねど梅華香匂ひ油に艶化粧、作手のかりし大化もの是けだものと仇名せり。四海芽出度太平に化ものさらに住家

なし。雨の降日の徒然に眠気さましの怪談の噺にかへしひとくさり化ものどもが嫁入は天地開びやく聞くことなければ素より絵にも書ものなし。その無き事を絵空言筆も狸の毛をたのみまづ婚禮の橋渡しに序するといふことしかり

嘉永三ツのとし酉の初

狢の穴住述

松井文庫本・宮崎県総合博物館本の序文に共通する要素に①嘉永三年（一八五〇）正月②狢穴住の二点がある。ただし、松井文庫本には「文久三癸亥春如月初日於暢懐堂南窓／写之／非画工／岡義訓」という奥書があり、文久三年（一八六三）成立と思われる。絵は岡義訓が描いたものであるが、原本は嘉永三年（一八五〇）成立であろうか。ただし、国際日本文化研究センター本の序文によると狢穴住は絵師ではなく、紹介者ということになる。

十返舎一九『化物の娵入』序文

十返舎一九作、勝川春英画『化物の娵入』は文化四年（一八〇七）刊、三巻三冊（合一冊もあり）。山口屋藤兵衛板。日本古典籍総合目録データベースによると、慶應義塾大学、東北大学狩野文庫、大阪大学、大東急記念文庫にあり、文化八年後印本が東北大学狩野文庫、静岡市木村文庫に所蔵される。また、先述の通りアダム・カバット氏『江戸化物草紙』〈注8〉に本作の影印・翻刻がある。外題「〈卯春新版〉化物の娵入」。類似の趣向、前例として赤本「ばけ物よめ入」（二巻、大東急記念文庫、無窮会神習文庫蔵）、青本『ばけ物よめ入』（二巻、東北大狩野文庫蔵）があるが、カバット氏によると「話の展開はほぼ同じだが、化物の無様な生き方を表す強烈な絵と文がなく、違う印象を与える」という。また、明治十四年（一八八一）に宮田伊助編「化物嫁入咄」〈注9〉という同趣向の本が出ているが、ここに序文はない。

中山尚夫氏『十返舎一九研究』〈注10〉「十返舎一九年譜稿」には「（文化四年）正月、一九作、勝川春英画の黄表紙『化物の娶入』三冊を山口屋藤兵衛から出版。文化八年に、一丁目を改刻して再板される」。巻末に「卯春絵双紙新版品」の広告があるように、（草双紙の常套ではあるが）この作品は正月の縁起物である。

十返舎一九『化物の娵入』の序文を見ると明らかに『化物婚礼』と関連性があるといえるだろう。

時雨に照るもみち葉は、狐の嫁入かと思ひ、闇にひく餅花は、鼡の結納かと疑ふ、されば鼡を嫁が君といひ、狐のよるの殿様といひて、むかしより草さうしに、鼡狐の嫁入あれども、化物の嫁入といふなし、胎卵湿化の四生、おの〳〵陰陽和合の道あらざるはなく、既に轆轤首に端正あり、雪女に艶美あり、幽霊に腰より下はなしといへ共、多くは膝より下のなきにして、ある」

所はあるものと、〈予〉年来ももんじゐの仲間に親み、化の皮の底を探り、則此書を著すことしかり

丁卯春　十返舎一九戯題

十返舎一九が序を記した丁卯春は文化四年（一八〇七）である。

「時雨に照るもみち葉は、狐の嫁入かと思ひ、闇にひく餅花は、鼠の結納かと疑ふ、されば鼠を嫁が君といひ、狐のよるの殿様といひて、むかしより草さうしに、鼠狐の嫁入あれども、化物の嫁入といふなし、胎卵湿化の四生、おの〳〵陰陽和合の道あらざるはなく、既に轆轤首に端正あり、雪女に艶美あり、」

この部分は東洋大学附属図書館蔵『化物婚礼』序と共通である。国際日本文化研究センター蔵『化物婚礼絵巻』はそのうちの傍線部のみ共通する。

奥書がある松井文庫蔵『化物婚姻絵巻』は文久三年（一八六三）成立。一方、個人蔵『化物婚礼絵巻』間部詮実（一八二七―一八六四）筆もあるが、文化四年（一八〇七）は間部詮実が生まれるよりも早い。十返舎一九『化物の娶入』の方が先行することになるが、共通の粉本（未見）があるとすると簡単には断定できない。

また、嘉永三年（一八五〇）の序文を持つ松井文庫蔵本と宮崎県総合博物館蔵本は近しい書写関係にあるといえるだろう。

この成立過程については、諸本全部の比較検討の上で慎重に行うべきであるが、同内容の草双紙と絵巻物、共通する部分、異なる部分を見くらべることは興味深い。そこで、一覧表に作ってみると次のようになる。（傍線・囲み線・句読点は稿者による）

東洋大学附属図書館蔵『化物婚礼』

時雨に照る紅葉はハ、狐の娶入かとあやしまれ、闇に引餅花ハ、鼡の結納かと疑ふ。されば鼠を嫁が君といひ、狐を夜の殿様といえり。鼠狐の嫁入あれども化物の婚礼なし。胎卵湿化の四生おのおの陰陽和合の道あらざるなし。轆轤首に端正あり、雪女に艶美あり。佐保姫石と化て海岸に待ち、殺生石は那須野がはらに苔むしたり。狸婆々とばけてかちかち山に名高く、茂林寺の茶釜爐中に化てぶんぶくの名を残し、皿屋敷の怨霊、おいわ、かさねの亡魂も化物の仲間にはゐり、三十振袖、四十嶋田、藻はかぶらねど、梅花香匂ひ油に艶化粧。作手のかたりし大化物是けだものと仇名せり。四海めで度太平に化物さらに住家なく、雨の降る日のつれづれも眠気ざましの怪談の咄にかえし一くさり。化物共が嫁入は天地開闢、聞くことなければ、もとより絵にもかくものなし。其無き事を絵空言。筆も狸の毛を頼ミ、先婚礼の橋渡しに序するということか。

国際日本文化研究センター蔵『化物婚礼絵巻』

世に画工を業として種々の物事を描く先生も
あれとも未た化物の奇々妙々を描きし人あらす
わか友　生は新たに工夫を　して図画す。然るに
狐の嫁入鼡の千種と疑ふ。されは鼡を嫁か君といひ
きつねを夜の殿さまといえり。鼡狐の嫁入りあれとも
化物の婚礼なし。胎卵湿化に四生おの〳〵陰陽和合の
道あらさるはなし。轆轤首に端正あり。雪女に艶美あ
り。
佐用姫は石と化し、海岸には舩幽霊殺生石は那須野に
苔むし狸は婆と化てかち〳〵山に名高く茂林寺の茶釜
炉中に化て文福の名を揚げ、皿屋敷のおきく、四ツ谷
の
おいは、かさねの亡霊も化物の仲間に入り、三十振袖
四十嶌田藻は冠らねと梅華香匂ひ油に艶化粧、昼に
かはりし大化もの是けたものと仇名せり。四海芽出度
泰平に化物更に棲なし。雨の降る日のつれ〳〵も
睡気さましに怪談の咄しにかへし一とくさり化物
ともの娶入りは天地開闢聞くことなければ元来
絵にもかくものなし。そのなきことを絵そらこと
筆も狸の毛をたのみまつ婚禮のはしわたしに
序するといふこと南
狢　穴住画（花押）

十返舎一九作、勝川春英画『化物の娶入』

時雨に照るもみち葉は、狐の嫁入かと思ひ、闇にひく餅花は、鼡の結納かと疑ふ、されば鼡を嫁が君といひ、狐のよるの殿様といひて、むかしより草さうしに、鼡狐の嫁入あれども、化物の嫁入といふなし、胎卵湿化の四生、おの〳〵陰陽和合の道あらざるはなく、既に轆轤首に端正あり、雪女に艶美あり、幽霊に腰より下はなしといへ共、多くは膝より下のなきにして、ある」所はあるものと、〈予〉年来ももんじゐの仲間に親み、化の皮の底を探り、則此書を著すことしかり
丁卯春　　十返舎一九戯題

松井文庫蔵『化物婚礼』

時雨に照るもみち葉は、狐の
嫁入かとあやしまれ、闇に引餅花は、
鼡の結納かと疑ふ。されば鼡を
嫁か君といひ、狐を夜のとの様と
いへり。ねつみ狐のよめ入有れとも
はけもの丶婚礼なし。胎卵湿化の
四生各陰陽和合の道あらざるは
なし。轆轤首に端正有り、雪女に
艶色あり。佐保姫石と化て海岸に
峙ち、殺生石は那須野がはらに苔
むしたり。狸は婆々と化てかち〳〵山に
名高く、茂林寺の茶釜は爐中
にはけてぶんぶくの名を残し、さら
屋敷の幽霊、お岩、重ねの亡魂も
はけもの丶仲間に入り、三十振袖、四十
嶋田、藻はかふらねと、梅花こふ
匂ひ油に艶化粧。作手のかたりし
大化物是けたものと仇名せり。
四海芽出度太平に化物更に住家
なく、雨の降る日の徒然に眠気
さましの怪談の噺にかへし一綴り。
化物ともか娵入は天地開ひやく
きく事なけれは、素より絵にも
書ものなし。其の無き事を繪
空言。筆も狸の毛をたのみ、まつ
婚禮の橋渡しに序するといふ
ことしかり。

よろこひ永き三ッのとし
たのしき初酉のむつき　／狢の穴住述

宮崎県総合博物館蔵『化物婚礼絵巻』

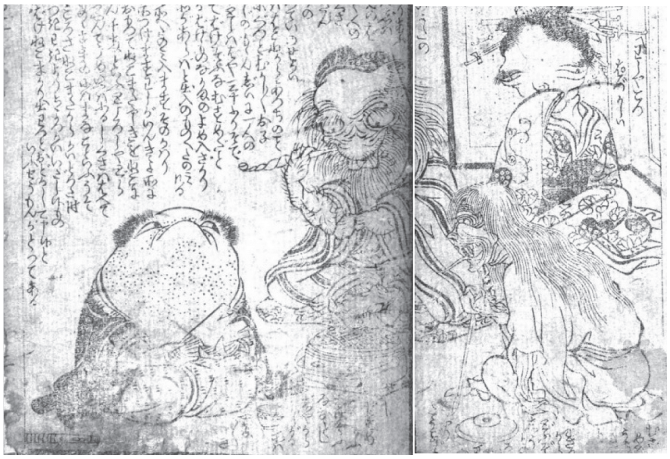
時雨に照るもみち葉は、狐の
嫁入かと思ひ、闇に引餅花は
鼡の結納かと疑ふ。されば鼡を
嫁が君といひ、狐を夜の殿様と
いへり。鼡狐の嫁入あれども、化物の
婚礼なし。胎卵湿化の四生、をの〳〵
陰陽和合の道あらざるはなし。轆轤
首に端正あり、雪女に艶色あり、
佐保姫石と化て、海岸に峙ち、
殺生石は那須野が原に苔むしたり。
狸は婆々と化てかち〳〵山に名高く
茂林寺の茶釜は鑪中に化て
ぶんぶくの名をのこし、皿屋敷の幽霊、
於岩、かさねの亡魂もばけもの丶の仲間に
入り、三十振袖四十嶋田藻はかぶらねど
梅華香匂ひ油に艶化粧、作手の
かりし大化もの是けだものと仇名せり。
四海芽出度太平に化ものさらに住家
なし。雨の降日の徒然に眠気
さましの怪談の噺にかへしひとくさり
化ものどもが嫁入は天地開びやく聞く
ことなければ素より絵にも書もの
なし。その無き事を絵空言筆
も狸の毛をたのみまづ婚禮の橋
渡しに序するといふことしかり
嘉永三ツのとし酉の初
狢の穴住述

明らかに異なるのは、前述の国際日本文化研究センター本の冒頭の次に、十返舎一九の末尾である。

『化物の娵入』には「〈予〉年来ももんじゐの仲間に親み、化の皮の底を探り、則此書を著すことしかり」というが、この「ももんじゐ」とはどのような化物か。

鳥山石燕『今昔絵図続百鬼』「百々爺」には次のように説明されている。

百々爺未詳。愚按ずるに、山東に摸捫窩と称するもの、一名野襖ともいふとぞ。京師の人小児を怖しめて啼を止むるに元興寺といふ。もゝんぐはとがごしとふたつのものを合せて、もゝんぢいといふか。原野夜ふけてゆきゝたえ、きりとぢ風すこきとき老夫と化して遊ぶ。行旅の人これに遭へば、かならず病むといへり。



ただし、十返舎一九の言う「ももんじゐの仲間」とは享和三年（一八〇三）刊・山東京伝『怪談摸摸夢字彙』〈注11〉のように化物全体を指すのだろう。この作品は「字彙」の名の通り辞典であり、ことば遊びに特化している。

また、『浮世風呂』に「ヲヲ、こはいの。早く寐しな。ももんぢいが来るよ」というように、「ももんぢい」とは、子どもを脅すときに使われる化物をいう。そもそも「ももんじ」とは猪や鹿狸などの獣、またはその肉をいう。そこから、毛深い化物を「ももんじい」という。化物とことば遊びは、一般的である。次に絵を見てみよう。

化物の造形

絵巻の『化物婚礼』と草双紙『化物の娵入』は共通する構図や、化物も多いが、大きく異なるのが、婿の一家である。

（下図参照）

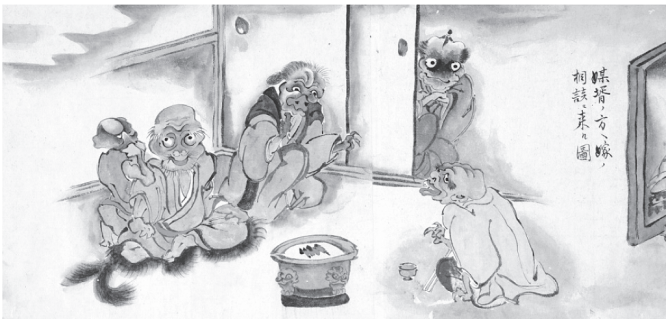
「ももんじい」という語には、女性の陰部をあらわす意があるという。『柳多留』（文化八年（一八一一）刊）「ももんぢい御覧とお乳母蚤を取り」の句がそれを意味するというが、婿の一家の顔はなにやら独特な描かれかたをしているところから、やはりその意味を含ませたものか。はっきりいうと、婿の一家は性器を模した造形になっている。さすがに、絵巻物ではそのような表現が避けられたのか、一つ目から二つ目へ、母親は赤鼻であったりと、その図像は大きく異なっている。

物語の構成

絵巻と草双紙にも違いがある。基本的には、縁談→結納→婚礼→祝宴→出産→宮参りである。しかし、大きな違いとして、やはり、⑰化物日ノ出ニ驚逃散図と⑱千秋萬歳寶入船の存在があるだろう。

草双紙は正月のものだけに、縁起のよい結末が求められる。絵巻物もそれを継承し、より整合性が整えられたのであろう。草双紙は宮参りの後、祝宴で終わっている。同様の図は、絵巻では⑭産ノ祝酒宴馳走図である。

この構成の整合性を考えると、草双紙から、絵巻へ転換されたと見るべきであろう。



ただし、そのまま草双紙を絵巻に転換するわけにはいかない。

（1）化物の卑猥な造形を変更

（2）婚礼の儀礼に乗っ取った描写

（3）「百鬼夜行絵巻」に似せた結末

（4）正月の縁起物をより豪華に変更

こういった、手が加えられ、絵巻物の体裁が整えられていったといえる。

絵巻と草双紙の関係を考えるとき、湯本氏の「版本は木版によって大量に刷られて誰もが入手できる庶民の読物だったのに対して絵巻は肉筆で描く一点物であり、一般庶民には無縁の代物なのである。（略）版本と絵巻の需要層は事なり、そのために絵巻ではグロテスクなものや生活感が抜き去られ、化物の嫁入りというユーモアだけを描くことによって需要者の要望を満たしていたのではないか」という指摘はわかりやすい。

一方、絵巻の諸本を見くらべてみると、題の表記の違い、場面の順序の違いなどが見られる。『化物の娵入』と東洋大学附属図書館蔵本・松井文庫本・宮崎県総合博物館本「化物婚礼」の構成を表にするとその差異が明確である。

宮崎県総合博物館本では、③婿嫁茶店ニ而見合之図　④嫁衣類仕立之図　⑤娵化粧之図　⑥嫁入礼道具運之図　⑦婿より結納送之図　⑧結納受取渡之図　⑨嫁入行列之図　の順になっており、他本と順序が異なる。また、湯本氏により紹介されている一本と国際日本文化研究センター本（題なし）は、③嫁婿見合ノ図　④婿ヨリ結納贈ル図　⑤結納請取渡し図　⑥嫁の道具を運ぶ図　⑦嫁婚礼の衣装を仕立の図　⑧嫁化粧の図の順となる。模写を重ねる上で入れ替わったものか、個別の問題があるのかは今後の課題である。

まとめ

草双紙における化物流行については、前述のカバット氏の著書をはじめ、十分に研究が備わっているようにも見えるが、ここに「絵巻物」としての享受という視点でこの「化物婚礼」「化物の娵入」を見てみると、その背景には「百鬼夜行絵巻」の影響が色濃く見える。「百鬼夜行絵巻」は江戸時代には狩野派など多くの絵師が模写し、再生産していた。東洋大学附属図書館にも数点あるが、それぞれ絵師により微妙に描写が異なる。描かれたものをどのように解釈したか、その最たる例がクライマックスの火の玉の表現であろう。「百鬼夜行絵巻」における尊勝陀羅尼の火は、草双紙（正月の縁起物）を経た「化物婚礼」においては夜明けの太陽へと変換される。重ねていうと、化物の異界（夜の世界）は夜明けとともに人間の世界へと転換する物語となる。

巻子本である絵巻は冊子本にくらべて、取り扱いが面倒ではある。しかしするすると巻広げ展開する絵物語は、現代のアニメーションにも似たおもしろさがあったといえるだろう。

本稿は絵巻物『化物婚礼』の諸本研究の試みとして序文と構成に着目し、その差異を示した。しかし、同内容でありながら、表現や構成にはそれぞれに違いがあり、書写関係を明確に系統立てるにはもう少し調査と検討を要する状況である。

しかし、翻って考えると、このバリエーションの多さこそが江戸時代の絵巻物の特長の一つといえるのではないだろうか。

江戸時代に多く描かれた『百鬼夜行絵巻』のように、依頼に応じて微妙な差異を表現する。十返舎一九『化物の娵入』とほぼ同内容

でありながら肉筆ならではの、一点物ならではの遊び心を入れるところに絵巻物の需要があったといえるだろう。

「化物婚礼」の構成表

十返舎一九『化物の娶入』（内容）	東洋大学附属図書館蔵『化物婚礼』（題あり）	松井文庫蔵『化物婚礼』	宮崎県総合博物館蔵『化物婚礼絵巻』	個人蔵『化物婚礼絵巻』間部詮実画
①仲人　嫁の家へ	①媒嫁ノ方へ婚姻申入ル図	①媒娶之方江婚姻申入ル図	①媒娶の方へ婚姻申入る図	①媒嫁ノ方へ婚姻申入ル図
②仲人　婿の家へ	②媒婿ノ方へ嫁ノ相談ニ来ル図	②媒婿ノ方江婚姻申入ル図	②媒婿之方江婚姻申入ル図	②媒婿ノ方へ嫁ノ相談ニ来ル図
③お見合い	③嫁婿見合ノ図	③婿娶見合之図	③婿嫁茶店ニ而見合之図	③嫁婿見合ノ図
④婿より結納品	④婿ヨリ結納贈ル図	④結納送之図	④嫁衣類仕立之図	④婿ヨリ結納贈ル図
⑤結納が届く	⑤結納請取渡し図	⑤結納使者之図	⑤娶化粧之図	⑤結納請取渡し図
⑥婚礼衣装の準備	⑥嫁婚礼衣装仕立図	⑥衣醤仕立之図	⑥嫁入礼道具運之図	⑥嫁婚礼衣装仕立図
⑦婚礼の日、嫁家を出る	⑦嫁化粧ノ図	⑦娶子化粧之図	⑦婿より結納送之図	⑦嫁化粧ノ図
⑧嫁入り行列	⑧嫁ノ道具運ノ図	⑧道具運之図	⑧結納受取渡之図	⑧嫁ノ道具運ノ図
⑨婚礼	⑨婚礼行列図	⑨行列之図	⑨嫁入行列之図	⑨婚礼行列図
⑩色直し	⑩婚礼儀式盃ノ図	⑩盃之図	⑩盃之図	⑩婚礼儀式盃ノ図
⑪部屋見舞い（親戚）	⑪婚礼祝膳ノ図	⑪祝膳之図	⑪祝膳之図	⑪婚礼祝膳ノ図
⑫出産	⑫纐帯ノ祝儀　一家祝ニ来図	⑫産見舞之図	⑫纐帯の祝ひに縁家より参る図	⑫安産ノ図
⑬宮参り	⑬安産ノ図	⑬誕生之図	⑬安産之図	⑬産ノ祝酒宴馳走図
⑭祝宴	⑭産ノ祝酒宴馳走図	⑭産祝之図	⑭産祝ひの図	⑭宮参図
⑮正月の凧	⑮宮参図	⑮（宮参図・題なし）	⑮宮参之図	⑮化物日ノ出ニ驚逃散図
	⑯化物日ノ出ニ驚逃散図	⑯旭出ニ驚逃去図	⑯化物旭出ニ驚逃去図	⑯千秋萬歳寶入船
	⑰千秋萬歳寶入船	⑰千秋萬歳寶入船	⑰千秋萬歳寶入船	

資料の閲覧・利用をお許しくださいました東洋大学附属図書館、八代市立博物館、宮崎県総合博物館、国際日本文化研究センター、国立国会図書館はじめ諸機関の方々、またご教示賜りました松井葵之松井文庫理事長、みなさまに厚く御礼申し上げます。

1 集英社新書『百鬼夜行絵巻の謎』二〇〇七年　集英社
2 アダム・カバット氏『江戸化物草紙』一九九九年　小学館
3 アダム・カバット氏『江戸化物草紙』一九九九年　小学館
4 展示図録『大妖怪展―土偶から妖怪ウォッチまで』二〇一六年　読売新聞社
5 国際日本文化研究センター蔵　本資料は怪異・妖怪絵姿データベースに画像が公開されている。http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiGazouCard/U426_nichibunken_0053.html
6 展示図録『特別展　今昔、日本の妖怪～百鬼夜行からゲゲゲまで』二〇一五年　宮崎県総合博物館
7 洋泉社MOOK『百鬼夜行と魑魅魍魎』二〇一二年　洋泉社
8 アダム・カバット氏『江戸化物草紙』一九九九年　小学館
9 国立国会図書館蔵　宮田伊助編『化物嫁入咄』一八八一年　http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/883117
10 中山尚夫氏『十返舎一九研究』二〇〇二年　おうふう
11 国立国会図書館蔵『怪談摸摸夢字彙』享和三年（一八〇三）序　http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9892965/4

Emaki and kusazoushi：Study of picture scroll ” Bakemonokonrei” and “Bakemono no yomeiri” ,by Ikku JUPPENSHA

OUCHI, Mizue

There are many documents about “Yokai:the ghost” in the library attached to Toyo University. Yokai can be written using other Chinese characters, 妖怪, and words such as yo, oni, obake (ghost), kaii (mysterious creature), kaibutsu (monster), kesho (reincarnated or transformed being), chimimoryo (evil spirits of mountains and rivers), tsukimono (something that possesses people or things), bake (ghost), bakemono (ghost), hyakki (hundred demons), henge (apparition), ma (devil), mamono (devil), mononoke (specter), mononoke, youi, yokaihenge (specter) are also used with a similar meaning.

One of them, “Bakemonokonrei:monster wedding ceremony” are picture scrolls, drawn for the Meiji period from the late Tokugawa period.

This picture scroll is drawn under the influence of "Hyakki yagyo emaki" established in the Muromachi era. It is the work which is very popular from the novelty called the wedding ceremony of the ghost and the beauty of the picture.

As seen from its name, Hyakki yagyo emaki is a collective name of picture scrolls where the appearance of 'Hyakki yagyo' (Night Parade of One Hundred Demons) is drawn.

The preface of the picture scroll informs that I am affected by Kusazoushi:the illustrated storybook. Kusazoshi is a story book that had illustrations and whose story was written with kana (the Japanese syllabary). Since the middle of the 18th century, the Sharebon and the Kibyoshi of the Kusazoshi had flourished. A lot of Gokan became popular in the genres of the Yomihon, the Ninjobon, and the Kusazoshi.

“Bakemono no yomeiri:monster wedding ceremony” called Gokan,By by Ikku JUPPENSHA.

It can watch difference between feudal lord and enjoyment of the literature of the common people to compare Kusazoushi with Emaki.